

新

健康

よもやま話

129



膵臓がんは治りにくく、進行の速いがん知られています。ついこの間までテレビに出ていた著名人が急に亡くなると膵臓がんであったというニュースを見聞きすることも多いような気がします。今日本では、がんによる死亡数で膵臓がんは第4位、1年におよそ3万5千人が膵臓がんになって、3万2千人くらいが亡くなるとされています。人口10万人あたり、25人から30人が亡くなるというところで、5年生存率はおよそ7%です。

のっけから「死」のお話で気持ちが暗くなるかもしれません。皆さんも膵臓がんは怖いがんであるという認識だと思いますが、けっして治らないがんではありません。そのように対していくか。そんなお話をします。

膵臓がんは予後の悪いがんだとみんな思っています。実際、がんの生命予後については5年生存率で説明されることが多いのですが、表1のように、ステージ1という比較的早い段階でもたとえば同じおなかの中のがんである大腸

膵臓がん ①

みはらもとひろ
諏訪赤十字病院 外科部長 三原 基弘



治療のカギは早期発見

がんと比べても悪いのです。ただしここで注意しなければいけないことは、大腸がんのステージ1の中には「早期がん」が含まれることです。一方膵臓がんにおける「早期がん」とはどのようなものをいうのでしょうか。膵臓がんでは、「上皮内がん」という状態がステージ0です。ステージ0の10年生存率は95%であるという

	膵臓がん	大腸がん
ステージ1	45.5%	95.1%
ステージ2	18.4%	88.5%
ステージ3	6.4%	76.6%
ステージ4	1.4%	18.5%

表1 膵臓がんと大腸がんのステージ別5年生存率
(がん診療拠点病院等院内がん登録生存率集計2010-2011年診断症例より)

家族歴	膵臓がん 遺伝性膵がん症候群
合併疾患	糖尿病 肥満 慢性膵炎 遺伝性膵炎 IPMNなど嚢胞性膵疾患
嗜好	喫煙 飲酒

表2 膵臓がんになりやすい因子(リスクファクター)
(膵臓診療ガイドライン2019年版より)

報告があります。また、ステージ1の中でも腫瘍の大きさが1cm以下のものに限れば5年生存率は80%であるという報告もあります。これら高い生存率から考えると、膵臓がんの場合、上皮内がんや大きさが1cm以下のものを早期がんに相当するものと考えてもよさそうです。

つまり、膵臓がんであっても早期発見により克服できるということです。10年くらい前に、転移を起している膵臓がんの自然史を遺伝子レベルで研究した報告がありました。それによると、膵臓がんががん細胞として誕生してから、いわゆる「がん」の性質を持つまで10年かから、それから5-6年かけて転移を起すようながん組織となり、転移を起して3年で生命を奪う、ということになります。およそ18年以上の自然史となるのですが、これが正しいとすれば、最初の15年程度のうちに膵臓がんを診断できれば、膵臓がんを打ち勝てる可能性が高いということです。私達には十分な期間が与えられていると思いませんか。もちろん実際の臨床では症状の出現を待ってからの診断であることが

ほとんどです。一方で、表2のような膵臓がんになりやすいということがわかっていきます。たとえば家族に膵臓がんの人がいる場合、一人いれば4.5倍、二人いれば6.4倍、3人以上いれば32倍通常よりなりやすいといわれます。糖尿病の人は約2倍、BMIが5以上だと1.1倍、ウエスト周囲が10cm増えると1.1倍、20歳代でBMIが30以上の男性は3.5倍、喫煙者は1.7倍膵臓がんになりやすく、喫煙期間や本数により増加します。分枝型膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMN)の人の1.1~1.2.5%に年間新たに通常型膵臓がんが発生するといわれています。このような人は膵がんの可能性がないか医者に聞いて検査をしてもらうとか、定期的な検査を繰り返すことで早期発見につながる可能性があります。

今回は、膵臓がんを診断されたとき、どのように治療をするか、お話しします。

筆者プロフィール
三原基弘(みはら もとひろ)
諏訪赤十字病院 外科部長
信州大学消化器外科・移植外科
千葉県がんセンター、ニューヨーク州立大学などを経て現職
出身：安曇野市
趣味：ランニング、カヌー、釣り

次回回は5月17日掲載予定